



バンドレ・アッパーズにおけるイギリス東インド会社商館の「通訳」（〈特集〉国際学会「東アジア海港都市の共生論理と文化交流」）

大東, 敬文

(Citation)

海港都市研究, 4:97-106

(Issue Date)

2009-03

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/81000954>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81000954>



バンドレ・アッバースにおけるイギリス東インド会社商館の「通訳」

大東 敬典
(DAITO Norifumi)

はじめに

バンドレ・アッバースは、ペルシア湾の出入り口にあたるホルムズ海峡北岸に位置する。この港町は、イラン高原に支配の基盤を持つサファヴィー朝勢力が、1622年に当時ホルムズ島を拠点に湾の交易を支配していたポルトガル勢力を駆逐し、その島の港湾機能を陸地側に移したことによって成立した。バンドレ・アッバースからは、ペルシア湾内各地やインド洋に隣接する諸地域を結ぶ航路が伸びる一方、イラン高原の諸都市を結ぶ陸路も伸び、港は、18世紀中頃まで、インド洋海域における地域間交易ネットワークの拠点として重要な位置を占めていた¹。また町には、17世紀初頭以来インド洋海域での交易に参入してきた、イギリス、オランダ、フランスの東インド会社が商館を設置し、ペルシアにおける商業活動の拠点としていた²。

17世紀から18世紀初めにかけてのバンドレ・アッバースは、サファヴィー朝の港町、インド洋海域における海上交易の拠点、東インド会社の商業活動の場として描かれてきた。近年では、サファヴィー朝の港町としての側面が注目されており [羽田 2001] , [Floor 2006]、とりわけ港の支配体制については、港の行政官に関するフロール氏の研究によって、その実態が明らかにされた³。またインド洋海域における海上交易の拠点としての側

1 バンドレ・アッバースからは、西にはハドラマウト、イエメンなどアラビア半島沿岸を経て、紅海や東アフリカに至る航路が伸び、東にはグジャラートやマラバル海岸などインド亜大陸西岸からベンガル湾や東南アジア方面に向かう航路が伸びていた。また内陸部には、ラルルやシーラーズを経てイスファハーンやヤズドに至る交通路と、ケルマーンからホラーサーンに至る交通路が伸びていた [羽田 2001: 1-3]。

2 イギリス東インド会社は1623年から1762年まで、オランダ東インド会社は同じく1623年から1759年まで、フランス東インド会社は17世紀後半の一時期に、町に商館を置いていた。

3 主にオランダ東インド会社関係資料を利用したフロール氏の研究によると、バンドレ・アッバースの主要な行政官には、スルターン (soltan) という統治者と、シャー・バンドル (shahbandar) という税関長がいた。彼らはそれぞれジャーネシーン (janeshin) という代官によって補佐され、彼らの

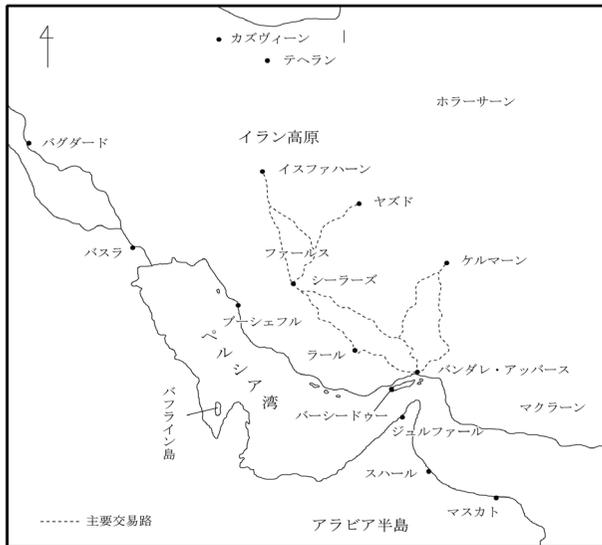


図1 イラン高原とペルシア湾海域〔羽田 2001:3〕所収の地図を基に作成。)

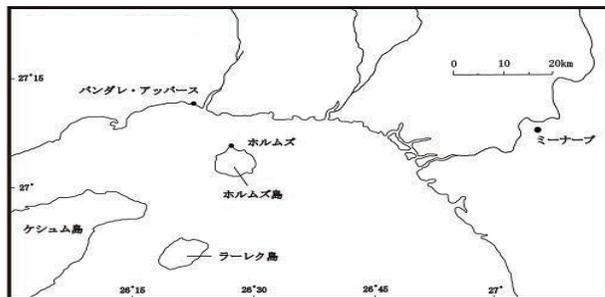


図2 ホルムズ海峡北岸〔羽田 2001:3〕所収の地図を基に作成。)

面に関しては、17世紀のペルシア湾における交易構造を詳細に分析した [Klein 1993-4]、港と内陸を結ぶ交易路を対象とした [Floor 1999] などによって、当時この港が占めていた位置や役割が明らかにされてきた。しかし、実際に交易活動に従事した商人たちの活動の実態については、これまで本格的に論じられたことがない⁴。また東インド会社の商業活動の場としての側面に関しては、従来研究では、会社の商業活動の把握に主眼が置かれてきた⁵。そのため会社と地域社会との関係については、なお多くの研究を要する。

そしてこうした研究状況は、この港社会を捉える視点にも影響を与えていると言える。フロール氏は、港の行政官と商人との関係についても触れてはいるものの、政治的

関心と経済的関心の対立を指摘するに留まり、港社会は、二者の関係から大まかに把握されているに過ぎない [Floor 2006: 304-12]。

そこで本稿では、従来研究では不足していた、個々の商人の活動の諸相を捉えて商人像

留守中は、代官に町の管理や港の業務を委ねた。彼らはまた、ナーイブ (na'eb) という代理人も持っていた。統治者は、行政・文武・司法に関するあらゆる問題を取り扱い、とりわけ法と治安に携わった。シャー・バンドルは、税関とあらゆる商業上の問題を監督した。また統治者は、一時的にシャー・バンドル職を兼ねることもあった [Floor 2006: 272-81]。

4 港の商人を対象とした研究としては、イギリス、オランダの東インド会社商館の通訳を務めた商人たちを取り上げた [羽田 2006] , [Haneda 2006] がある。また [Klein 1993-4] も、有益な情報を含む。

5 例えば、[Ferrier 1970] , [Floor & Faghfoory 2004] など。ただし会社の商業活動の把握を基に、地域経済について考察を試みた [al-Khalifa 1988] のような研究もある。

を描くという作業を行うことで、港社会の実態を浮かび上がらせ、港社会を二者の関係から捉える従来の視点を見直してみたい。分析対象には、東インド会社と地域社会との関係についても考えるため、イギリス商館が「通訳」として使用した港の有力商人を取り上げる。史料としては、イギリス商館における日々の業務が記され、港社会についても有益な情報を含む日誌（以下、商館日誌）を利用する。フロール氏の研究がオランダ東インド会社関係資料に依拠しているため、本稿は、イギリス東インド会社関係資料を用いることで、従来とは異なる視点から港社会を捉えることを試みるものでもある。

1 イギリス商館の「通訳」としての現地商人

バンダレ・アッパーズのイギリス東インド会社商館は、現地の人々との交渉や話し合いに、複数の現地商人を使用していた。ここでは、現在までに参照し得た1726年11月23日[12/4]から1729年2月3日[2/14]までの商館日誌を基に、そうした商館の「通訳」の内、現地政権との交渉や話し合いに携わった二人の商人についてまとめてみたい⁶。

イギリス商館の「通訳」として現地政権との交渉や話し合いに携わった現地商人には、まず通訳 (the Linguist) と呼ばれる人間が挙げられる⁷。当時の通訳は、Coja Matteus というアルメニア系のキリスト教徒であった [IOR, G/29/4, f. 21a]⁸。現地政権などとの意思疎通にはペルシア語が必要とされ、当時ペルシアに滞在した商館員の中には、ペルシア語を学ぶ者もいた⁹。しかし現地の人々との連絡、交渉、話し合い、さらには手紙の

6 日付は、商館日誌に記されたユリウス暦のものを記し、後ろの括弧内にグレゴリウス暦のものを記す。商館日誌は、British Library に India Office Records (以下、IOR) の一部として保存されている。現存する商館日誌は、1708年のものが最も早く、まとまって残ってくるのは1726年11月23日[12/4]以降である。また1720年代については、1727年8月1日[8/12]から1728年11月19日[11/30]までの記録を欠いている。

7 イギリス商館の通訳に関しては、[羽田 2006]、[Haneda 2006] が、その具体的な活動を取り上げている。羽田氏は、バンダレ・アッパーズの東インド会社商館の通訳と長崎の阿蘭陀通詞を比較し、それぞれの港町の背後にある社会の特徴について考察した。その議論の全容については、[羽田 2007]。

8 主に17世紀にペルシアを中心としてヨーロッパから東アジアにかけて展開されたアルメニア商人の交易活動については、[カーティン 2002: 249-82]。17、18世紀のインド洋におけるアルメニア商人の交易活動については、[Aghassian & Kévonian 1987]。サファヴィー朝期のペルシアにおけるイギリス東インド会社とアルメニア商人との関係については、[Ferrier 1973]。

9 イギリス東インド会社のロンドンの本社は、バンダレ・アッパーズやイスファハーンの前商館員に対して、ペルシア語を学ぶことを奨励していた [羽田 2006: 111]。1721年3月10日[3/21]現在のペルシアの前商館員のリストには、「言語研修中 (learnng: ye: language)」とされている人物が二名いる [IOR, G/29/15, f. 28]。

作成¹⁰に至るまで、通訳が商館員に代わって行っていた。

また当時の通訳は、イスファハーンとバンダレ・アッバースを結ぶ街道上の要地、シーラーズに彼の使用人を置き、情報を入手して交易活動に従事していた [IOR, G/29/3, f. 4a]。キリスト教徒である彼は、シーラーズの特産品であるワインの貿易に携わっており、インドの会社の居留地向けにシーラーズ産ワインを輸出していた商館は、彼からもそれを仕入れていた [IOR, G/29/3, f. 14b] , [IOR, G/29/4, ff. 73b-74a]。そして通訳がこうした交易活動などを通して持つ人的ネットワークは、商館にとって貴重な情報源ともなっていた [IOR, G/29/3, f. 12b] , [IOR, G/29/4, f. 27a, f. 50b] , [IOR, G/29/5, f. 4b]。

またその他に商館が「通訳」として使用した現地商人には、ブローカー (the Broker) と呼ばれる人間がいた。当時のブローカーは、Kessourjee/Kesourjee というインド系の人物で、親子二代に亘って商館のブローカーとして活動していた [IOR, G/29/4, f. 72b] ¹¹。彼は、会社の商品の仲買 [IOR, G/29/3, ff. 4a-b]、会社の船で運ぶ商品の収集 [IOR, G/29/5, f. 3b]、両替商 (Shroffs) の選定 [IOR, G/29/3, f. 14b] などを行い、主に商館と現地商人とを結びつける役割を果たしていた。

またブローカーは、その回数は多くはないものの、通訳が港に不在であったとき、会社の権利をめぐる現地政権と交渉したように、重要な交渉を任せられることもあった [IOR, G/29/4, ff. 23a-b] ¹²。

10 1728年12月2日 [12/13]、イギリス商館は通訳に、ケシュム島西端の港、バーシードウーの支配者である Shaik Rachide に対して、彼を非難する手紙を書くよう命じている [IOR, G/29/5, f. 10b]。通訳がそのときペルシア語で手紙を作成したことは、1727年4月28日 [5/9] の商館での会議において、Shaik Rachide への外交文書 (Memorial) をペルシア語に写し、彼に届けることが決議されていることから分かる [IOR, G/29/4, f. 18a]。

11 バンダレ・アッバースには、インド系の人々が数多く居住していた。1680年代後半に町に滞在したケンペルは、その住民の多くが「ムルターン人 (Multhanen)」や「バニヤ (Benjanen)」であったと述べている [Meier-Lemgo 1968: 138]。ムルターンは、現在のパキスタンのパンジャーブ州中部の町。バニヤは、当時の欧文献ではヒンドゥー教徒やジャイナ教徒一般を指すこともあるが、その内でも特に商人を指す。16世紀から18世紀にかけてのインド商人のインド洋世界への進出と後退については、[長島 2000]。イランや中央アジア、ロシア方面に展開された「ムルターン人」の商業活動については、[Dale 1994] , [Levi 2002]。

12 この他にイギリス商館が現地の人々との交渉や話し合いに使用した現地商人には、商館員に代わってケルマーンに滞在し、山羊の毛の買い付けを行う人々がいた [IOR, G/29/3, f. 1b] , [IOR, G/29/3, f. 28a] , [IOR, G/29/5, f. 1b]。イギリス、オランダの東インド会社による山羊の毛の交易については、[Matthee 1993]。

II 現地政権との関係

では、Iで取り上げたイギリス商館の「通訳」たちと現地政権との関係はどのようなものだったのだろうか。1727年7月4日[7/15]の商館日誌には、彼らが商館の「通訳」として現地政権と交渉するだけでなく、現地政権側に立って交渉する一面も持っていたことを示す、興味深い記述が見られる。

ブローカーと通訳が、商館長に、毎年この地の統治者にささやかな贈り物をするのがこれまでずっと慣習となっていたが、彼〔統治者〕はこのところ非常に長くそのことに満足していないと述べ、彼〔商館長〕に説いて、このような重大なときには、とりわけそれ〔慣習〕に従わせた。(The Broker & Linguist having represented to the Cheif, That it had allways heretofore been a Custom to present the Govr: of the place wth: some small matter yearly in wch: he had not for a Considerable time past been Gratified induced him the rather to Comply therewith at this juncture) [IOR, G/29/4, f. 67a]

この記述は、イギリス商館のブローカーと通訳が、商館側に、慣習である例年の贈り物を受け取っていないという港の統治者の不満を伝え、統治者側に立って、商館がそれを守るよう説得したことを伝えている。フロール氏によると、この贈り物は、交易期の終わりに政府の役人が、個々の商人から彼らを丁重に扱う保証として受け取るものだったという[Floor 2006: 306]。この贈り物には、統治者の権威を認める意味があると言えるだろう。したがって、このときブローカーと通訳は、イギリス商館に統治者の権威を認めるよう働きかけたことが分かる。

III イギリス商館と現地政権との関係

IIで見たように、イギリス商館のブローカーや通訳は、商館の「通訳」として現地政権と交渉するだけでなく、現地政権側に立って商館と交渉する一面も持っていたが、彼らがそうした二面性を持つことにはどのような意味があったのだろうか。ここでは、IIで取り上げた事例の当時、イギリス商館が港において置かれていた立場を見、商館と現地政権との関係を明らかにすることによって、それについて考えてみたい。

1722年10月、サファヴィー朝の都イスファハーンが、東方のカンダハールから進軍してきたアフガン族によって陥落した。しかしアフガン族がイスファハーンを掌握した後も、残存するサファヴィー朝勢力との抗争や、オスマン帝国、ロシアの侵攻によって、イラン高原は極めて不安定な状況に置かれていた。そしてこうした混乱は、当時のバンダレ・アッバースにも多大な影響を与え、港の周辺には、その利権を狙う様々な勢力が入り乱れていた。港には Mahomud Sally begg という統治者がいたが、近隣地域には Sultan Mahomed Mirzah というサファヴィー家の王子を名乗る人物が、港の支配権を主張して活動していた¹³。また混乱の中で港を追われた、かつてのシャー・バンドルである Mirzah Zaid Ally という人物が、アフガン族の支援を受け、復権を目指してイスファハーンから進んでいた¹⁴。さらにこの時期には、内陸部や港の治安の悪化のため、多くの商人がケシュム島西端の港、バーシードゥーに拠点を移しており [d'Anville 1764: 151-2]、それによって力をつけた、その地の支配者である Shaik Rachide という人物が、バンダレ・アッバースの支配を狙いこの争いに加わっていた¹⁵。

そしてイギリス東インド会社もまた、こうした港の政治情勢を利用して自らの利権を確保しようとしていた。会社は、港の関税収入の一部に対して持つ権利を主張し、その譲渡を統治者の Mahomud Sally begg に迫ると同時に、バンダレ・アッバースのシャー・バンドルを自称していたバーシードゥーの Shaik Rachide に対しても、同様の理由で遠征を行った [IOR, G/29/4, ff. 19a-b]¹⁶。したがって当時のイギリス東インド会社は、港の政治情勢に深く関与する存在であったと言える。

そのため、IIで既述の、商館のブローカーと通訳が商館側に慣習の遵守を求めた、1727年7月4日 [7/15] 当時の商館日誌には、バンダレ・アッバースの利権を狙う諸勢力が、イギリス商館との関係の強化を求めている様子が記されている。

13 港の統治者である Mahomud Sally begg は、サファヴィー朝を支持する立場から、表面的にはこのサファヴィー家の王子を名乗る人物に服従していたが、貢納を執拗に求められ、彼に反抗する動きも見せていた [Floor 1998: 302-3]。

14 彼は、1688年以來バンダレ・アッバースのシャー・バンドル職を独占してきた、イヴァーズ・ベグ家の出身であった [Floor 2006: 296-304]。

15 フロール氏の研究によると、グレゴリウス暦1725年6月10日、Shaik Rachide は彼の代理人に命じ、バンダレ・アッバースの城塞を占領させたという [Floor 1998: 291]。

16 イギリス東インド会社は、サファヴィー朝によるホルムズ島征服の際、船を持たない王朝軍を島に輸送し、援護射撃を行うことで、その成功に大きく貢献した。そのため会社には、歴代の王によって、バンダレ・アッバースの関税収入の一部を譲り受ける権利が与えられていた。サファヴィー朝のヨーロッパ諸勢力の海軍力への依存については、[Floor 2007: 1-21]。会社の特権をめぐる問題については、[Floor 2006: 312-5] , [al-Khalifa 1988: 19-43] , [羽田 2007: 203-6]。

(1) Mahomud Sally begg

1727年4月29日 [5/10]、イギリス東インド会社は、バーシードゥーへの遠征に向かう直前に、彼に通訳を派遣し、初めてその決行を通知した。商館日誌によると、そのときの彼の表情や会話には多くの混乱が見られ、それは迫り来る混乱に巻き込まれるのではないかという懸念と、Mirzah Zaid Ally に政府を明け渡したくないという気持ちを物語っていたという。また彼は、近隣地域にいる Sultan Mahomed Mirzah が、Mirzah Zaid Ally に対抗するため、港に進軍してくるという情報を受けており、通訳に、商館長は港に混乱が生じた場合、誰に商館を監督するよう命じたのかを尋ねたという [IOR, G/29/4, ff. 21a-b]。

ここからは、彼が、Mirzah Zaid Ally に対抗するため、また混乱から身を守るために、イギリス商館を頼みにしていることが分かる。

また Mirzah Zaid Ally の港への入場が目前に迫った 1727年7月29日 [8/9]、彼は、Mirzah Zaid Ally が彼をナーイブ (Naib) に任命し、その受諾を求めていることを、イギリスの商館長に伝えた。そして彼は、商館長に、彼がその命を受けるべきかどうか尋ね、翌日には回答してくれるよう求めている [IOR, G/29/4, f. 80a]。

ここからも、彼のイギリス商館に対する依存が読み取れる。

(2) Mirzah Zaid Ally

1727年4月30日 [5/11]、イギリス商館はイスファハーンの商館員から、2月25日 [3/8] 付けの通知を受け取った。それによると、アフガン族の王、アシュラフ (在位 1725-9) によってバンダレ・アッパースのシャー・バンダレ (Shawbunder) 兼統治者 (Cawn or Governour of the Town & Castle) に任命された彼は、1727年2月23日 [3/6]、イスファハーンから旅立つ際に、まず彼らの商館を訪問したという。そしてそこで、彼が港を手中にしたときには、混乱期に会社が被った負担や損失を賠償するよう努力するなど語ったという [IOR, G/29/4, ff. 22b-23a]。

ここからは、彼が、港での復権のために、会社を味方につけておこうとしたことが分かる。

(3) Sultan Mahomed Mirzah

1727年6月18日 [6/29]、Mirzah Zaid Ally の港への接近を受けて、彼はイギリスの商館長に、統治者の Mahomud Sally begg と共同でバンダレ・アッパースのシャー・

バンドル職を務めるよう命じた。そして彼は、商館長に、港の関税収入から会社の毎年の取り分を取ることを任せ、さらに港の税関の全役人に対して、商館長に従い適切な敬意を払うよう命じたことを伝えている [IOR, G/29/4, f. 47b]。

ここからは、彼が、Mirzah Zaid Ally に対抗するために、商館を味方に取り込もうとしたことが分かる。

以上から、当時のイギリス商館が、港の利権を狙う諸勢力に必要とされ、港の情勢の帰趨を握る存在であったことが分かる。港の統治者にとって、イギリス商館から例年の贈り物を受け取り、その権威を認めてもらうことは、とりわけ港に迫る Mirzah Zaid Ally に対抗し、その地位を安定させるために、必要不可欠なことであったであろう。したがって、このときその実現をイギリス商館に働きかけたブローカーと通訳は、仲介者として、商館と現地政権を結びつける役割を担っており、港社会に非常に大きな影響を与えていたと言えるだろう。

おわりに

従来研究では、バンドレ・アッバースの港社会は、現地政権と商人の二者の関係から大まかに捉えられるに留まっていた。しかし本稿では、イギリス東インド会社商館が「通訳」として使用した現地商人の活動を分析し、港社会の実態を浮かび上がらせることによって、その視点の見直しを試みた。

その結果、商館の「通訳」は現地政権側に立って商館と交渉し、現地政権の権威を認めるよう働きかける一面も持つことが明らかになった。またその当時のイギリス商館と現地政権との関係を明らかにすると、そうした「通訳」の行動が、仲介者として両者を結びつける役割を担い、港社会に非常に大きな影響を与えるものであったことが読み取れた。

本稿で取り上げたのは一事例に過ぎず、これをもって現地政権・イギリス商館・その「通訳」の三者の関係を一般化することは出来ないだろう。また、本稿では扱わなかったオランダ商館の事例についても検討する必要がある。しかしこれら三者の関係からは、元来内陸を支配の基盤としていたサファヴィー朝によるペルシア湾海域への進出と、16世紀以来のヨーロッパ諸勢力によるインド洋海域への進出と発展、そしてそれらを引きつけると同時に、それらによって促進、あるいは制約された、インド洋海域を中心とした国際商業の進展という三つの流れが、1720年代後半のバンドレ・アッバースにおいて絡み合う様

子を見出すことが出来る。したがって今後は、三者の関係の変遷を追うことで、それらの流れがどのように変化していくのかを見ていきたい。

参考文献

一次文献

- d'Anville, M. 1764, "Recherches géographiques sur le Golfe persique et sur les bouches de l'Euphrate et du Tigre". *Mémoires de littérature, tirés des registres de l'Académie Royale des Inscriptions et Belles-Lettres*, 30, 132-197.
- IOR: *India Office Records, East India Company Factory Records: Persia and the Persian Gulf*.
- Meier-Lemgo, K. 1968, *Die Reisetagebücher Engelbert Kaempfers*. Wiesbaden.

二次文献

- Aghassian, M. & Kévonian K. 1987, "Le commerce arménien dans l'Océan Indien aux 17^e et 18^e siècles". In: D. Lombard & J. Aubin (eds.), *Marchands et hommes d'affaires Asiatiques*. Paris, 155-181.
- Dale, S.F. 1994, *Indian Merchants and Eurasian Trade, 1600-1750*. Cambridge.
- Ferrier, R.W. 1970, *British-Persian Relations in the 17th Century*. Ph.D. dissertation, University of Cambridge.
- Ferrier, R.W. 1973, "The Armenians and the East India Company in Persia in the Seventeenth and Early Eighteenth Centuries". *The Economic History Review*, 26(1), 38-62.
- Floor, W. 1998, *The Afghan Occupation of Safavid Persia 1721-1729*. Paris.
- Floor, W. 1999, "The Bandar 'Abbas-Isfahan Route in the Late Safavid Era (1617-1717)". *Iran*, 37, 67-94.
- Floor, W. & Faghfoory, M.H. 2004, *The First Dutch-Persian Commercial Conflict: The Attack of Qeshm Island, 1645*. California.
- Floor, W. 2006, *The Persian Gulf: A Political and Economic History of Five Port Cities 1500-1730*. Washington, D.C.
- Floor, W. 2007, *The Persian Gulf: The Rise of the Gulf Arabs: The Politics of Trade on the Persian Littoral, 1747-1792*. Washington, D.C.
- Haneda, M. 2006, "Les compagnies des Indes Orientales et les interprètes de Bandar 'Abbās".

- Eurasian Studies*, 1-2, 175-193.
- al-Khalifa, K.K. 1988, *Commerce and Conflict: The English East India Company Factories in the Gulf, 1700-47*. Ph.D. dissertation, University of Essex.
- Klein, R. 1993-4, *Trade in the Safavid Port City Bandar Abbas and the Persian Gulf (ca. 1600-1680): A Study of Selected Aspects*. Ph.D. dissertation, University of London.
- Levi, S.C. 2002, *The Indian Diaspora in Central Asia and its Trade, 1550-1900*. Leiden.
- Mathee, R. 1993, "The East India Company Trade in Kerman Wool, 1658-1730". In: J. Calmard (ed.), *Etudes Safavides*. Paris & Téhéran, 343-383.
- カーティン P.D. 2002 (田村愛理・中堂幸政・山影進訳) 『異文化間交易の世界史』 NTT 出版株式会社.
- 羽田正 2001 「バンドレ・アッバースとペルシア湾海域世界」 『歴史学研究』 757, 1-11,42.
- 羽田正 2006 「バンドレ・アッバースの東インド会社商館と通訳」 歴史学研究会編 『港町に生きる (シリーズ 港町の世界史 3)』 青木書店, 95-123.
- 羽田正 2007 『東インド会社とアジアの海 (興亡の世界史 15)』 講談社.
- 長島弘 2000 「インド洋とインド商人」 『イスラーム・環インド洋世界 (岩波講座世界歴史 14)』 岩波書店, 141-165.

(神戸大学大学院人文学研究科)